

# 都市娯楽活動へのアクセシビリティが主観的幸福感に及ぼす影響に関する研究

弓場 雅斗<sup>1</sup>・川端 祐一郎<sup>2</sup>・藤井 聡<sup>3</sup>

<sup>1</sup>学生会員 京都大学大学院 工学研究科都市社会工学専攻 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4)  
E-mail:yuba.m@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

<sup>2</sup>正会員 京都大学大学院助教 工学研究科都市社会工学専攻 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4)  
E-mail:Kawabata.yuichiro@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

<sup>3</sup>正会員 京都大学大学院助教 工学研究科都市社会工学専攻 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4)  
E-mail:fujii@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

余暇における都市娯楽活動は人間の幸福度に一定の影響を及ぼすと考えられ、その実施には多くの場合活動場所への移動が必要であるが、交通手段の利便性が都市娯楽活動を通じて幸福感に与える影響は殆ど明らかにされていない。本研究は、人々の生活にゆとりや豊かさをもたらす余暇における都市娯楽活動に着目し、活動へのアクセスの容易さや活動頻度等と「主観的幸福感」との関係について検証することを目的とする。また、アクセシビリティ指標としては、移動費や移動時間といった客観的指標のみではなく、場所への行きやすさや交通手段の満足度といった主観的指標に着目している。

結果、主観的アクセシビリティや活動頻度の高さが人々の主観的幸福感を高め得ることが一部の余暇活動で示唆された。また、主観的アクセシビリティが高いほど余暇活動の頻度が多くなることも示唆された。

**Key Words :** *subjective well-being, leisure activity, perceived accessibility*

## 1. 本研究の背景と目的

### (1) 交通インフラが果たす多様な役割

従来我が国の交通インフラ政策は、主として経済発展に対応するもの、あるいはそれを促すものとして推進されてきたと言える。交通インフラの機能評価についても、新規道路の建設・車線増加などによる交通容量の増加や、交通速度上昇による移動時間の短縮といった客観的・物理的な指標に基づいて行われてきた。しかし、交通インフラはそれ以外にも、地域の歴史や人々の暮らし方を形作るという、社会的・文化的・心理的な影響を持つものであるとも言われ、その多様な役割に着目した政策や研究が必要とされている<sup>1)</sup>。そうした効果に着目した研究は、現在までのところ多く存在するわけではないのであるが、とりわけ都市部の交通政策において、そうした側面の考慮は今後ますます重要になるものと考えられる。大都市においては交通インフラが量的には充足していると指摘されることも多いが、仮にそれが正しいのだとしても、それを利用する人々による「使いやすさ」といった主観的評価が低いものであったり、それが利用者の生

活満足度の向上に繋がっていなかったりするならば質的に改善する余地があり、インフラ整備プロジェクトがもはや不要ということにはならないからである。

従来の交通インフラ整備計画やその評価においては、具体的に、「走行時間短縮」「走行経費減少」「交通事故減少」の3指標が道路建設実務における便益として考慮されている<sup>2)</sup>費用便益分析が用いられてきた。これらは、比較的短期的に影響をもたらされるものであり、かつ、客観的な評価も比較的容易な項目である。一方で、利用者の心理に与える影響を測定する尺度は、客観的尺度に比べて軽量化が困難であることもあり、十分に政策判断において考慮されてこなかった<sup>1)</sup>。そのような主観的尺度の中でも特に「幸福感」は、厚生水準に直接繋がりをうける指標であり、それ自体が施策目標になり得ると近年の研究で指摘されている<sup>3)</sup>。交通インフラが個人の幸福感や生活満足度に与える影響は、今後のとりわけ都市部の交通インフラ整備において重要な論点の一つとなるべきであると考えられ、そのため一層の研究蓄積が必要である。

## (2) 主観的幸福感と余暇活動

ところで、主観的な幸福感とは自分の生活の総合的な質について、それが自分の要望や期待とどの程度合致しているかに関わる主観的評価と定義され、その評価水準は自らの属する社会についての評価水準に少なからず影響を及ぼすことが知られている<sup>4)</sup>。

高度成長期の終焉以来我が国では、経済的豊かさのみならず「ゆとりある生活」をも追求すべきであるとの議論が広く行われており、「生活の質」(QoL)の向上が叫ばれて久しい。また、社会の変化による自由時間の増加に伴い、余暇活動は単なる生活における気晴らし、暇つぶしとしてではなく、生活そのものの生きがいを求めて「する時間」として認識させるようになり、生活の力点としてますます人々に意識されてきている<sup>5)</sup>。しかしながら、余暇活動をいかに充実させるかに関する研究や行政上の取り組みは、余暇活動の多様性や「必要不可欠」な活動ではないとの理由<sup>6)</sup>から活発であるとは言えない。しかし上述したように、近年ますます余暇活動の重要度は増しているとされているのであるから、今後その改善に行政が取り組む場合に有用な知見が得られるという意味でも、余暇活動の充実方法やそれが幸福感に与える影響の研究を進めることには価値があるはずである。

人々が本来取り組みたい活動を実施したり、活動の幅を広げたりするための方法には様々なものが考えられるが、そのうちの重要なものの一つとして、「活動へのアクセシビリティ」の改善が考えられる。交通インフラの充実によって「より望ましい活動」へアクセスできる可能性が増大するであろうことを考えると、公共政策を通じた「改善」の打ち手が様々に検討できるという点で、活動へのアクセシビリティの向上とそれを通じた幸福感の増大は、重要な研究課題であると言える。

ところで、余暇活動の多様化・個人化に伴い数多くの余暇活動が考えられる中で、とくに芸術鑑賞をはじめとする文化的な娯楽活動が、人々の幸福感を向上させるだけでなく都市の「創造性」を上げることが近年指摘されており、実際に「創造的都市」という概念が1994年の国際文化経済学会で提起されている。「創造的都市」に関する研究は、他の先進国地域よりも早い段階で経済の停滞が見られたヨーロッパにおいて深まっており、たとえばLandryは、芸術文化が持つ創造的なパワーを生かして社会の潜在力を引き出そうとするヨーロッパの都市の試みに注目した<sup>7)</sup>。そもそも美の享受はマズローの欲求段階説においても、高次の欲求に位置するとされており<sup>8)</sup>、美の享受により高次の欲求が満たされる人は主観的幸福感が高いと指摘されている<sup>9)</sup>。また芸術鑑賞と同様に、身体を使い創造的活動に自ら参加することは幸福感をもたらすとも指摘されており<sup>8)</sup>、人々の幸福の増進を考え

る上で、芸術娯楽への参加を促すような都市計画には重要な意義があるといえる。また余暇活動に関連させ都市の活性化を目指す取り組みについては芸術文化に着目した創造的都市だけでなく、スポーツに着目した「スマート・ベニュー」も挙げられる。スポーツを行うことは人々の健康に関する自己評価を向上させ、そのことが主観的幸福感向上につながるということが推察されている<sup>10)</sup>。また、創造的都市・スマート・ベニューの推進は、実際に文化・芸術活動を鑑賞、身体を使って参加したり、運動を習慣化させ健康を維持するだけでなく、共通の趣味を持つ他者との交流にもつながる。性別や年齢、人生経験などの異なる人々との多様な交流は主観的幸福感に影響を与えると指摘されている<sup>11)</sup>。上記のように、創造的都市・スマート・ベニューといった芸術・スポーツに関連した都市娯楽活動への参加を促す都市計画は人々の幸福の増進を考える上で、重要な意義があるといえる。

以上のような背景に基づき、本研究では芸術やスポーツ観戦といった都市娯楽活動へのアクセシビリティに着目して、その改善による人々の幸福感向上の可能性を検討する。具体的には、都市娯楽活動へのアクセシビリティが、活動の頻度および人々の主観的幸福感に及ぼすか否かを実証的に把握するための実験を東京都、政令指定都市在住者を対象に行う。娯楽活動としてはコンサート鑑賞、ミュージカル、舞台や落語の観劇、スポーツ観戦等を取り上げ、オンラインでのアンケート調査を実施し、娯楽活動へのアクセシビリティと活動頻度の関係、そして活動の頻度と主観的幸福感の関係について定量的な検証を行う。この実験から得られたデータの考察、各都市によるデータの比較を通じて、交通インフラの充実が娯楽活動の頻度を高め、そのことを通じて人々の幸福感が向上し得るのか否かを明らかにした上で、どのような交通政策・都市計画がこのプロセスを改善し得るかを検討し、今後の活力ある街づくりに資するような知見を供することを目的とする。

## 2. 既往研究と本研究の位置づけ

### (1) 主観的幸福感に関する既往研究

主観的幸福感とは自分の生活の総合的な質について、それが自分の要望や期待とどの程度合致しているかに関わる主観的評価と表現されており、幸せ、生活の満足感、ポジティブ感情など多様な概念を含むものとされている<sup>4)</sup>。主観的幸福感とは肯定的な「感情」(positive affect, PA)と否定的な「感情」(negative affect, NA)、そして暮らし全体への「認知」的な満足感の三つの要素により構成されるとする研究が多くなされている<sup>3) 4)</sup>。肯定的な感情と否

定的な感情を合わせた感情的幸福感は「うれしい」「快い」などの感情に代表される幸福水準(valence)と、「活発さ」や「積極性」といった幸福活性化(activation)の二つの尺度から構成されると言われている<sup>12)</sup>。この幸福水準—幸福活性化尺度はRussellの円環モデル<sup>13)</sup>を元としている。Russellの円環モデルとは、喜びと覚醒の二つの感情を軸とした平面を考え、日常的に抱く28の感情が平面のどこに位置するかを検証し、それらの感情が円環上に並ぶとするモデルである。モデルは順次改善されており、Russellら<sup>14)</sup>では二つの感情の軸をvalence(価)、activation(活性)と呼称している。

valenceとactivationについては、形容詞を選択したり、形容詞で表した感情の程度を尋ねたりすることにより、質問紙での測定が試みられている。Västfjällら<sup>15)</sup>は、ある作業時の被験者の感情が「うれしい」「活発だ」などの形容詞にどの程度当てはまるか尋ねた。得られたデータの因子分析を行い、形容詞を二つの因子に分けた。それぞれの因子内で形容詞間の相関を調べ、高い負の相関を示した形容詞のペア(うれしい—悲しい、精力的—静か、等)を作成し、valenceとactivationの構成項目とした。また北川<sup>16)</sup>らはVästfjällらのSCAS尺度(Swedish Core Affect Scale)を参考とした尺度を用い、感情的幸福感を測定している。感情の水準については、「うれしい—悲しい」、「幸せな—不幸な」、「快い—不快な」という各形容詞のペアを、感情の活性化については、「積極的な—消極的な」、「活発な—退屈な」、「ハッキリした感じ—ぬむたい感じ」という各形容詞のペアを質問項目としている。そして、4段階の感情水準を設定し(例えば、「うれしい—悲しい」の場合、「とてもうれしい気持ち」、「少しうれしい気持ち」、「少し悲しい気持ち」、「とても悲しい気持ち」)、それぞれの水準・活性化について日々の暮らしの中でそうした感情を抱く頻度を「とても頻繁に感じた」から「全く感じなかった」までの5件法で尋ねている。

一方で、認知的幸福感とは、自己の生活における満足感を表現している。認知的幸福感の測定に関しては、Satisfaction With Life Scale (SWLS尺度)<sup>12)17)</sup>が幸福研究において最も頻繁に用いられており、様々な国で測定、比較がなされている<sup>18)</sup>。SWLS尺度は自分の人生が理想に近いのか、満足しているのかどうかといった暮らしに関する満足感についての5つの質問群からなる尺度であり、7件法で回答された値を合計して、尺度値とすることが多い。

## (2) 余暇活動と主観的幸福感に関する既往研究

主観的幸福感と余暇活動については、いくつか既往研究が行われている。例えば、Lloydら<sup>19)</sup>は余暇活動とQoLの関連を調べるために余暇施設の数などのplace-centred指

標だけでなく、余暇活動の満足度・余暇活動の頻度などのperson-centred指標の両方に着目し、余暇活動の頻度が最もQoLとの関連を調べる良い指標だと結論付けている。

また国内の研究に目を向けると関連を調べている研究があるものの対象者が高齢者であることが多い。具体的には、山口ら<sup>20)</sup>は中高年齢者(40歳以上)を対象に生活の満足度とスポーツ・余暇活動の頻度・満足度の関係を明らかにしている。高齢者は余暇の活動内容が多様なだけでなく、余暇化の活動量も多く余暇の満足度が生活の満足度に結びついている。一方で、中年者は時間的な余裕がなく、仕事中心で気晴らし的余暇活動に埋没しているため、余暇活動の満足度の生活の満足度に対する影響はすくないという結果が出ている。しかしながら、生活の満足度を説明する要因の中で、余暇の満足度が学歴や年齢といったデモグラフィック要因、経済的指標よりも強い影響を持っていることは明らかにされている。また、橋本ら<sup>21)</sup>は余暇活動の種目を、外出を伴う割合と他者との交流が生じる割合を元に「外出交流系活動」「個人外出系活動」「外出・在宅系活動」「個人在宅系活動」の4つに分類し、外出を行い、移動を伴う余暇活動をすることが高齢者の主観的幸福感を高める上で有効だと明らかにしている。

## (3) アクセシビリティに関する既往研究

従来のアクセシビリティに関する研究では、施設の数や施設までの距離など客観的指標によってアクセシビリティを計測してきたが、この場合実際に余暇活動を行う個人の能力や価値観は考慮されていない。Pacione<sup>22)</sup>は生活環境評価には客観的指標と主観的指標のいずれかを利用するだけでは不十分であり、それらの指標は補完的に利用されるべきだとしている。また、Lättmanら<sup>23)</sup>は、客観的アクセシビリティは高齢者や障害者といった特定のグループでの比較は可能であるが、様々な人が日常的に使う交通のアクセシビリティ計測には実際に利用した人の主観的評価が必要だとし、主観的アクセシビリティを測定することの重要性を指摘した。そして既往研究をもとに考えた4つの主観的アクセシビリティ尺度(Perceived Accessibility Scale)を開発した。

## (4) 本研究の位置づけ

本研究では、Lättmanら<sup>23)</sup>がまとめた主観的アクセシビリティの測定項目を利用し、余暇活動の頻度との関係をアンケート調査を通じて検討する。その際、客観的アクセシビリティも質問に含め、主観的アクセシビリティと客観的アクセシビリティの関係についても精査を行う。また、余暇活動の頻度と人々の主観的幸福感の関連性も調べる。主観的幸福感の測定方法としては、北川ら<sup>16)</sup>の

幸福水準—幸福活性度尺度で感情的幸福感を、SWLS尺度で認知的幸福感を測定する。従来の研究のように高齢者のみを対象とするのではなく、全年齢層を対象として、幸福感、余暇活動の実態、余暇活動へのアクセス手段等についてアンケート調査を行うものである。具体的には、それらの調査データを用いて、「余暇活動の頻度が上がることで幸福感が増す」「アクセシビリティが向上することで、余暇頻度が増す」という仮説を検証することで、余暇活動を促進させるような交通インフラ拡充政策が人々の幸福にとって有益であるか否かを明らかにする。

### 3. 調査について

#### (1) 調査概要

クロス・マーケティング社のインターネット調査サービスのモニターから東京都23区、政令指定都市20都市に在住している20代から60代の男女それぞれ50名、計500人を抽出し、Webによるアンケート調査を実施した。調査は、2019年1月16日から1月18日の期間内に行った。

#### (1) 調査項目

##### a) 個人属性

個人属性として、年齢、性別、職業、居住地はモニターの登録プロフィールから取得した。それらの項目に加えて、年収、結婚、子供の人数の回答を依頼している。これら各項目の分布を表-1、表-2、表-3に示す。

表-1 職業分布

	度数	割合 (%)
会社勤務 (一般社員)	281	28.1
会社勤務 (管理職)	68	6.8
会社経営 (経営者・役員)	12	1.2
公務員・教職員・非営利団体職員	48	4.8
派遣社員・契約社員	65	6.5
自営業 (商工サービス)	52	5.2
SOHO	11	1.1
農林漁業	1	0.1
専門職 (弁護士・税理士等・医療関係)	15	1.5
パート・アルバイト	121	12.1
専業主婦	154	15.4
学生	35	3.5
無職	115	11.5
その他の職業	22	2.2
合計	1000	100

表-2 年収

	度数	割合 (%)
200万円未満	95	9.5
200万～300万円未満	79	7.9
300万～400万円未満	97	9.7
400万～500万円未満	106	10.6
500万～600万円未満	85	8.5
600万～700万円未満	60	6
700万～800万円未満	62	6.2
800万～900万円未満	38	3.8
900万～1000万円未満	47	4.7
1000万～2000万円未満	116	11.6
2000万～3000万円未満	9	0.9
3000万円以上	5	0.5
答えたくない	201	20.1
合計	1000	100

表-3 結婚の有無、子供人数

		度数	割合 (%)
結婚	未婚	490	49
	既婚	510	51
子供人数	0人	571	57.1
	1人	170	17
	2人	182	18.2
	3人	68	6.8
	4人	9	0.9

##### b) 主観的幸福感に関する項目

日常生活における幸福感として、感情的な幸福感と認知的な幸福感をそれぞれ測定する。感情的幸福感は、S北川ら<sup>16)</sup>の既往研究に基づき、「生活の喜び」(valence)軸を測定する項目と、「生活活性化」(activation)軸を測定する項目からなる幸福水準—幸福活性度尺度により計測する。認知的幸福感については、生活への満足感尺度 (Satisfaction with life scale. 以下SWLS)<sup>17)</sup>を用いて計測する。幸福水準—幸福活性度尺度については、北川らがSCAS尺度の質問項目を参考に、被験者が日常で感じている喜び(valence)と心身の活性化(activation)を表す対となる形容詞からそれぞれ3組ずつ抽出している。valanceについては、「うれしい—悲しい」、「幸せな—不幸な」、「快い—不快な」という3組、activationについては「積極的な—消極的な」、「活発な—退屈な」、「ハッキリした感じ—ねむたい感じ」という3組を抽出している。本研究でも同様に6組の形容詞のペアを質問項目として使用する。各形容詞のペアに対し、4段階の感情水準を設定し(例えば、「うれしい—悲しい」の場合、「とてもうれしい気持ち」、「少しうれしい気持ち」、「少し悲し

い気持ち」、「とても悲しい気持ち」), それぞれの水  
準について日々の暮らしの中でそうした感情を抱く頻度  
を「とても頻繁に感じた」から「全く感じなかった」ま  
での5件法で尋ねた. 表4に質問項目を示す.

上記の各形容詞対について, 以下の例に示すように,  
感情の「水準」及び「活性度」の指標値を求めた.

例) 「うれしい-悲しい」の場合

$$\begin{aligned} & 3 \times (\text{「とてもうれしい気持ち」を感じた頻度}) \\ & + 1 \times (\text{「少しうれしい気持ち」を感じた頻度}) \\ & + (-1) \times (\text{「少し悲しい気持ち」を感じた頻度}) \\ & + (-3) \times (\text{「とても悲しい気持ち」を感じた頻度}) \end{aligned}$$

上記の算定式より求めた感情の水準と活性度に関する  
指標の加算平均から感情的幸福感の尺度を構成した.

SWLS尺度については大石<sup>18)</sup>を参照して和訳し, 表4  
に示す質問項目を用いた. それぞれ「いいえ」と「はい」  
を両端とした7件法にて回答を依頼した. 各項目の回答  
値を合計し, SWLSの尺度値として用いることとした.

表4 主観的幸福感の質問項目

#### 主観的幸福感

【幸福水準】	うれしい-悲しい 幸せな-不幸な 快い-不快な
【幸福活性度】	積極的な-消極的な 活発な-退屈な ハッキリした感じ-眠たい感じ

#### 客観的幸福感

ほとんどの面で, 私の人生は私の理想に近い.  
私の人生はとても素晴らしい.  
私は自分の人生に満足している.  
私はこれまで, 自分の人生に求める大切なものを得てきた.  
もう一度人生をやり直せるとしてもほとんど何も変えないだろう.

#### c) 余暇活動に関する項目

すべての参加者に, 余暇活動の実施状況について回答  
を求める. 余暇活動の種類は, まず「コンサート等を聴  
きに行く」「ミュージカル・舞台・落語等を観に行く」  
という2つの活動について, すべての参加者に回答を求  
める. またこれに加え, 「映画を観に行く」, 「スポー  
ツをしに行く」, 「スポーツを観戦しに行く」, 「遊園  
地・テーマパークに行く」, 「美術館に行く」, 「動物  
園・水族館・博物館等に行く」の中から参加者が最もよ  
く行うものを選択した上で, その活動について回答する  
ことを求めた. 選択活動の分布を表5に示す.

表5 選択活動の分布

	度数	割合 (%)
映画を観に行く	354	35.4
スポーツをしに行く	136	13.6
スポーツを観戦しに行く	124	12.4
遊園地・テーマパークに行く	95	9.5
美術館に行く	105	10.5
動物園・水族館・博物館等に行く	186	18.6
合計	1000	100

余暇活動の実施状況については, 頻度, 活動仲間, 活  
動を開始する時刻の回答を依頼した.

頻度に関しては, 「週/月/年」から選択をした上で,  
回数の回答を依頼した. 活動仲間に関しては, 「一人で  
することが多い」「友人とすることが多い」「家族とす  
ることが多い」「同僚とすることが多い」「その他」の  
5つの選択肢を提示した. 開始時刻に関しては, 最も代  
表的な時間帯を平日, 休日のどちらですることが多いか  
を含めて回答を依頼している.

余暇活動へのアクセス(交通手段)について, 参加者  
には余暇活動場所まで「行く」場合とその活動が終わっ  
て「帰る」場合のそれぞれについて回答してもらった.

「行く」場合では, 出発地点, 交通手段, 移動時間, 一  
回当たりの費用を尋ねている. 出発地点の選択肢として  
自宅, 職場・学校等, その他の3つを提示し, 交通手段  
に関しては電車, バス, クルマ, 自転車, 徒歩, タクシ  
ー, その他の8つの選択肢を提示した. それらに加えて,  
Lättmanらの主観的アクセシビリティ指標をもとに表6に  
示す3つの質問項目を設けた. Lättmanらの4つの主観  
的アクセシビリティ指標のうち1つはアンケート回答者  
がみな同じ交通手段を利用する場合有効であるが, 本研  
究では交通手段を限定していないので除いた. そのほか  
の3つの項目に関しては, 一つ目は移動のしやすさを,  
二つ目はその活動をする際に交通の便の良さはどの程度  
影響しているのかを, 三つ目は交通手段の満足度を問う  
ている. これらの質問項目には「いいえ」「はい」を両  
端とした7件法にて回答を依頼した.

表6 主観的アクセシビリティ指標

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・行き/帰りの移動は, 不都合なく, 「スムーズ」(円滑)にできますか?</li> <li>・行き/帰りの移動で使う「交通手段」が便利だからこそ, その活動ができると感じますか?</li> <li>・行き/帰りの移動で使う「交通手段」に満足していますか?</li> </ul> |
|---|

「帰る」場合は「行く」場合と同様に出発地点、交通手段、移動時間、一回当たりの費用、そして主観的アクセシビリティ指標の回答を依頼している。さらに、帰りの移動を始める時刻、そして帰りの移動に不便な点があるかどうかを聞いている。

するためクロンバックの $\alpha$ を算出した。その結果を表-8に示す。すべての尺度において $\alpha > .90$ と一定程度の信頼性が認められた。

#### 4. 分析結果

##### (1) 尺度の信頼性

本研究では、複数の項目から構成される幸福感尺度を用いているが、まずはその信頼性を確認するためクロンバックの $\alpha$ を算出した。その結果を表-7に示す。

表-7 主観的幸福感尺度の信頼性分析

尺度名 (項目数)	N	$\alpha$
幸福水準 (3 項目)	1000	0.88
幸福活性度 (3 項目)	1000	0.73
感情的幸福感 (6 項目)	1000	0.85
認知的幸福感 (5 項目)	1000	0.96

全ての尺度において $\alpha > .70$ と一定程度の信頼性が認められたため、前述の算出法に基づき尺度を作成することとした。

また、余暇活動のアクセシビリティとして主観的アクセシビリティ尺度を測定しているが、その信頼性を確認

表-8 主観的アクセシビリティ指標の信頼性分析

尺度名 (項目数)	N	$\alpha$
コンサート鑑賞 (6項目)	600	0.95
ミュージカル等の観劇 (6項目)	489	0.96
最頻余暇活動 (6項目)	895	0.97

##### (2) 基本統計量

余暇活動に関する基本統計量を表-9、表-10にまとめた。表-9は各余暇活動頻度の平均値、標準偏差をまとめたものである。表-10は地域別、余暇活動別の主観的アクセシビリティ、移動費、移動時間の平均をまとめたものである。主観的アクセシビリティの算出方法としては、余暇活動を行う場所へ「行く」移動と場所から「帰る」移動それぞれにおいて尋ねている3つの主観的アクセシビリティ指標の平均をとり、さらに行きと帰りの主観的アクセシビリティ指標を平均したものをその活動への主観的アクセシビリティとして算出した。移動費と移動時間に関しては行きと帰りを合計し往復でかかるものとして算出した。なお、本研究では東京23区とそれ以外の政令指定都市の比較を行うため、表-9、表-10に関しては東京と東京以外で分けて集計を行った。

表-9 余暇活動頻度の集計

東京				東京以外			
レジャー	平均値	標準偏差	頻度1以上の人数/人数	レジャー	平均値	標準偏差	頻度1以上の人数/人数
コンサート	3.854	18.9678	254/500	コンサート	3.824	18.4542	237/500
ミュージカル舞台落語	3.644	15.3608	190/500	ミュージカル舞台落語	3.936	27.0519	162/500
映画	7.542	17.1113	153/177	映画	8.621	21.3408	152/177
スポーツ	77.125	80.6949	61/64	スポーツ	73.944	67.3910	69/72
スポーツ観戦	10.661	23.3371	54/62	スポーツ観戦	6.968	14.1108	51/62
遊園地テーマパーク	8.755	19.3816	42/49	遊園地テーマパーク	5.826	14.3144	36/46
美術館	8.436	15.6924	49/55	美術館	4.060	5.0119	44/50
動物園水族館博物館	4.452	12.1928	68/93	動物園水族館博物館	3.989	12.1167	66/93

表-10 主観的アクセシビリティ、移動費、移動時間の集計

地域	コンサート				ミュージカル・舞台・落語				映画				スポーツ			
	回答者	主観ACC	移動費	移動時間	回答者	主観ACC	移動費	移動時間	回答者	主観ACC	移動費	移動時間	回答者	主観ACC	移動費	移動時間
東京	254	5.12	934.25	84.61	190	5.22	873.95	77.55	153	5.51	512.42	50.88	61	5.65	582.79	55.34
東京以外	237	5.10	1503.59	96.77	162	5.08	1333.95	87.90	152	5.55	524.01	52.24	69	5.64	567.39	63.14
地域	スポーツ観戦				遊園地・テーマパーク				美術館				動物園・水族館・博物館			
	回答者	主観ACC	移動費	移動時間	回答者	主観ACC	移動費	移動時間	回答者	主観ACC	移動費	移動時間	回答者	主観ACC	移動費	移動時間
東京	54	4.99	1205.56	125.96	42	4.81	1597.62	103.24	49	5.31	723.47	84.94	68	5.05	803.68	90.63
東京以外	51	4.92	2735.10	113.29	36	4.56	6038.89	145.89	44	5.27	981.82	88.64	66	5.39	1165.91	94.30

**(3) 余暇活動が主観的幸福感に及ぼす影響の検証**

余暇活動が主観的幸福感に及ぼす影響について詳しく検討するため、主観的幸福感を従属変数とする重回帰分析を行った。説明変数としてステップワイズ法を用いて変数選択を行った。まず、個人属性として回答者に尋ねた項目のうち、性別、年齢、子供人数、結婚の有無、職業、世帯年収を変数化し重回帰分析の説明変数候補とする。性別は男性を0、女性を1とし、年齢・子供人数は連続変数とした。結婚の有無に関しては未婚を0、既婚を1とするダミー変数を作成した。職業については回答者を学生、主婦、無職、それ以外の4つに区分し、それぞれダミー変数を作成した。世帯年収は選択肢の間をとることで数値化した。「200万円未満」は100万、「答えたくない」と回答した被験者は分析の対象から除いた。変数化した個人属性、コンサート鑑賞頻度、ミュージカル等の観劇頻度、最も行う余暇活動頻度、及びそれぞれの主観的アクセシビリティ、交互作用項として頻度に主観的アクセシビリティを掛け合わせたものと各頻度に行き電車を利用したものを1とする電車利用ダミーを掛け合わせた計22項目を変数候補とし、ステップワイズ法により変数選択を行い、回帰分析を行った。ステップワイズに投入した変数の一覧を表-11に示す。

**a) 感情的幸福感を従属変数とした回帰分析**

感情的幸福感を従属変数とし、説明変数をステップワイズ法により変数選択を行った重回帰分析の結果を表-12、表-13に示す。東京在住者はコンサート鑑賞の主観

表-11 ステップワイズ法に投入した変数一覧

コンサート頻度/観劇頻度/最頻余暇頻度
コンサート主観ACC/観劇主観ACC/最頻余暇主観ACC
コンサート主観ACC×頻度/観劇主観ACC×頻度/最頻余暇主観ACC×頻度
コンサート頻度×電車利用ダミー/観劇頻度×電車利用ダミー/最頻余暇頻度×電車利用ダミー
学生ダミー、主婦ダミー、無職ダミー、世帯収入、結婚ダミー、性別ダミー、年齢、名古屋ダミー、大阪ダミー、子供人数

的アクセシビリティが、政令指定都市はミュージカル等の観劇の主観的アクセシビリティが感情的幸福感に統計上有意な正の影響を及ぼしていることが示唆された。この結果より、場所への行きやすさや交通手段の満足度が高いほど感情的幸福感が高い可能性があることを意味している。

表-12 従属変数：感情的幸福感（東京のみ）

	非標準化係数	標準化係数	t値	p値
(定数)	-2.44		-2.47	0.01 *
コンサート主観ACC	0.44	0.16	2.36	0.02 *
結婚ダミー	1.30	0.17	2.52	0.01 *
学生ダミー	2.27	0.12	1.80	0.07 †

N=205, R<sup>2</sup>=0.071, 調整済みR<sup>2</sup>=0.057    \*\*:p<.01, \*p<.05, †p<.10

表-13 従属変数：感情的幸福感（東京以外）

	非標準化係数	標準化係数	t値	p値
(定数)	-3.15		-3.23	0.00 **
性別（男=0, 女=1）	1.81	0.23	3.39	0.00 **
世帯収入	0.00	0.20	2.89	0.00 **
観劇主観ACC	0.20	0.13	1.92	0.06 †
年齢	0.03	0.13	1.84	0.07 †

N=188, R<sup>2</sup>=0.142, 調整済みR<sup>2</sup>=0.124    \*\*:p<.01, \*p<.05, †p<.10

**b) 認知的幸福感を従属変数とした回帰分析**

次に、認知的幸福感を従属変数とし、説明変数は前節と同様の方法で選択し重回帰分析を行った。重回帰分析の結果を表-14、表-15に示す。東京在住者及び東京以外の場合でもコンサート鑑賞の主観的アクセシビリティとコンサート鑑賞頻度を掛け合わせた交互作用項が正に有意な結果が得られた。つまり、コンサートに行きやすさ頻度が多い人ほど認知的幸福感が高いことが示唆された。加えて、東京以外の政令指定都市在住者に関しては、最もよく行う活動として回答者が選んだ最頻余暇活動の主観的アクセシビリティも正に有意な結果が得られた。認知的幸福感においては、活動場所への行きやすさだけでなく、コンサート鑑賞という一部の活動だけではあるが頻度が高いほど、幸福感が高くなる可能性が示唆された。

表-14 従属変数：認知的幸福感（東京のみ）

	非標準化係数	標準化係数	t値	p値
(定数)	15.02		17.26	0.00 **
世帯収入	0.00	0.17	2.43	0.02 *
結婚ダミー	2.63	0.19	2.67	0.01 **
学生ダミー	5.48	0.16	2.42	0.02 *
コンサート主観ACC	0.01	0.12	1.83	0.07 †

N=202, R<sup>2</sup>=0.11, 調整済みR<sup>2</sup>=0.094    \*\*:p<.01, \*p<.05, †p<.10

表-15 従属変数：認知的幸福感（東京以外）

	非標準化係数	標準化係数	t値	p値
(定数)	15.34		10.50	0.00 **
学生D	5.38	0.17	2.40	0.02 *
最頻余暇主観ACC	0.49	0.13	1.82	0.07 †
コンサート主観ACC×頻度	0.01	0.13	1.85	0.07 †
性別（男=0, 女=1）	1.48	0.12	1.73	0.08 †

N=188, R<sup>2</sup>=0.078, 調整済みR<sup>2</sup>=0.058    \*\*:p<.01, \*p<.05, †p<.10

**(4) 主観的アクセシビリティが活動頻度に及ぼす影響の検証**

次に主観的アクセシビリティが活動頻度に及ぼす影響

について詳しく検討するため、従属変数をコンサート、ミュージカル等の観劇、最もよく行う最頻余暇活動の頻度とする重回帰分析を行った。説明変数は従属変数に対応する各余暇活動の主観的アクセシビリティ、(2)にて変数化した個人属性の計11項目からステップワイズ法により変数選択を行い、重回帰分析を行った。投入した変数一覧を表-16に示す。

表-16 ステップワイズ法に投入した変数一覧

従属変数に対応する各余暇活動の主観ACC
学生ダミー, 主婦ダミー, 無職ダミー, 世帯収入, 結婚ダミー, 性別ダミー, 年齢, 名古屋ダミー, 大阪ダミー, 子供人数

分析結果を表-17～表-22に示す。表-17, 表-18は従属変数をコンサート鑑賞頻度としたもので、東京と東京以外で分けて分析を行った。結果が示すように、東京, 東京以外どちらにおいても主観的アクセシビリティの効果が正で統計的に有意であることが示唆される。

表-17 従属変数：コンサート鑑賞頻度（東京のみ）

	非標準化係数	標準化係数	t値	p値
(定数)	1.18		1.47	0.14
コンサート主観ACC	0.75	0.20	3.99	0.00 **
主婦ダミー	-3.19	-0.11	-2.20	0.03 *

N=396, R<sup>2</sup>=0.047, 調整済みR<sup>2</sup>=0.042    \*\*:p<.01, \*p<.05, † p<.10

表-18 従属変数：コンサート鑑賞頻度（東京以外）

	非標準化係数	標準化係数	t値	p値
(定数)	4.68		2.28	0.02 *
コンサート主観ACC	0.54	0.13	2.65	0.01 **
世帯収入	0.00	0.13	2.61	0.01 **
年齢	-0.14	-0.17	-3.29	0.00 **
子供人数	1.10	0.11	1.99	0.05 *

N=391, R<sup>2</sup>=0.068, 調整済みR<sup>2</sup>=0.059    \*\*:p<.01, \*p<.05, † p<.10

表-19, 表-20は従属変数をミュージカル等の観劇頻度としたもので、東京と東京以外で分けて分析を行った。結果が示すように、どちらの地域においても主観的アクセシビリティが高いほどミュージカル等の観劇頻度が高まることを意味している。

表-19 従属変数：観劇頻度（東京のみ）

	非標準化係数	標準化係数	t値	p値
(定数)	7.35		3.82	0.00 **
観劇主観ACC	0.77	0.20	4.07	0.00 **
年齢	-0.14	-0.18	-3.42	0.00 **
子供人数	1.25	0.11	2.20	0.03 *
性別ダミー (男=0, 女=1)	-1.88	-0.09	-1.79	0.07 †

N=394, R<sup>2</sup>=0.076, 調整済みR<sup>2</sup>=0.067    \*\*:p<.01, \*p<.05, † p<.10

表-20 従属変数：観劇頻度（東京以外）

	非標準化係数	標準化係数	t値	p値
(定数)	6.20		1.46	0.15
観劇主観ACC	0.89	0.10	1.99	0.05 *
子供人数	3.59	0.16	2.95	0.00 **
主婦ダミー	-5.64	-0.09	-1.72	0.09 †
年齢	-0.16	-0.09	-1.67	0.10 †

N=391, R<sup>2</sup>=0.036, 調整済みR<sup>2</sup>=0.026    \*\*:p<.01, \*p<.05, † p<.10

表-21, 表-22は従属変数を最頻余暇活動頻度としたもので、東京と東京以外で分けて分析を行った。結果が示すように、どちらの地域においても最頻余暇活動の主観的アクセシビリティが頻度に統計上正に有意な影響を与えることが確認された。この結果は、最頻余暇活動を行う上で行きやすいほど頻度が多くなる可能性を示唆している。

表-21 従属変数：最頻余暇頻度（東京のみ）

	非標準化係数	標準化係数	t値	p値
(定数)	-8.20		-1.36	0.18
最頻余暇主観ACC	3.33	0.16	3.21	0.00 **
世帯収入	0.01	0.13	2.48	0.01 *
無職ダミー	16.96	0.11	2.13	0.03 *

N=395, R<sup>2</sup>=0.039, 調整済みR<sup>2</sup>=0.034    \*\*:p<.01, \*p<.05, † p<.10

表-22 従属変数：最頻余暇頻度（東京以外）

	非標準化係数	標準化係数	t値	p値
(定数)	-2.43		-0.47	0.64
最頻余暇主観ACC	3.71	0.20	4.07	0.00 **
性別ダミー (男=0, 女=1)	-9.09	-0.13	-2.52	0.01 *
世帯収入	0.01	0.10	2.08	0.04 *

N=392, R<sup>2</sup>=0.064, 調整済みR<sup>2</sup>=0.057    \*\*:p<.01, \*p<.05, † p<.10

## 5. 本研究で得られた知見と課題

従来の交通インフラ整備においては、移動の時間短縮や費用の削減といった客観的な評価が重要視されてきた。しかし、本研究で得られた知見は、今後個人の幸福感や生活満足感に注目が集まる中、交通機関の「使いやすさ」といった主観的評価が余暇活動頻度の増加につながり、少なくとも一部の余暇活動については、余暇活動の頻度や交通手段への満足度のような主観的アクセシビリティが個人の主観的幸福感の増進に寄与する可能性が示唆された。

なお、本研究で得られたデータにおいては、頻度と主観的アクセシビリティの交互作用は有意な正の結果が得られる場合もあったが、頻度のみの説明変数は有意な結果が得られなかった。頻度のみに関しては、1回以上であれば何回実施しても主観的幸福感に大きな影響を与えない等の可能性が考えられ、頻度が0回の人と1回以上の人に分けて分析を行うなどより詳細な分析が必要である。



と考えられる。

また、主観的アクセシビリティに関して、コンサート頻度、ミュージカル・舞台、最もよく行う最頻余暇活動頻度との間に正の有意な関係が見出された。今回抽出した3種類の活動に関しては、行きやすさや交通手段の満足度が上がることで、余暇活動の頻度が多くなることが示唆された。一方で、移動費や移動時間といった客観的アクセシビリティと行きやすさや交通手段の満足度といった主観的アクセシビリティとの関連は今後より詳細な分析が必要だと考えられる。

本研究で行った重回帰分析に関しては、統計上有意味な結果が出たものの多くの分析においてR<sup>2</sup>が0.01近くもしくは大きく下回っており、今後は主観的幸福感や活動頻度を説明する統制変数を工夫するなど改善の余地がみられると考えられる。

**付録：全質問項目**

※本アンケートには、本研究にて分析を行っていない項目もあるが、参考に全文掲載する。

SC1 あなたの性別をお知らせください。 1. 男性 2. 女性
SC2 あなたの年齢をお知らせください。 (半角数字でご記入ください) ※自由回答
SC3 あなたのお住まいの地域をお知らせください。 1. 北海道 2. 青森県 3. 岩手県 4. 宮城県 5. 秋田県 6. 山形県 7. 福島県 8. 茨城県 9. 栃木県 10. 群馬県 11. 埼玉県 12. 千葉県 13. 東京都 14. 神奈川県 15. 新潟県 16. 富山県 17. 石川県 18. 福井県 19. 山梨県 20. 長野県 21. 岐阜県 22. 静岡県 23. 愛知県 24. 三重県 25. 滋賀県 26. 京都府 27. 大阪府 28. 兵庫県

29. 奈良県 30. 和歌山県 31. 鳥取県 32. 島根県 33. 岡山県 34. 広島県 35. 山口県 36. 徳島県 37. 香川県 38. 愛媛県 39. 高知県 40. 福岡県 41. 佐賀県 42. 長崎県 43. 熊本県 44. 大分県 45. 宮崎県 46. 鹿児島県 47. 沖縄県
SC4 あなたのお住まいの市町村をお知らせください。 1. 東京都23区内 2. 大阪市 3. 名古屋市 4. 京都市 5. 横浜市 6. 神戸市 7. 北九州市 8. 札幌市 9. 川崎市 10. 福岡市 11. 広島市 12. 仙台市 13. 千葉市 14. さいたま市 15. 静岡市 16. 堺市 17. 新潟市 18. 浜松市 19. 岡山市 20. 相模原市 21. 熊本市 22. その他の市区町村
SC5 あなたの職業をお知らせください。 1. 会社勤務（一般社員） 2. 会社勤務（管理職） 3. 会社経営（経営者・役員） 4. 公務員・教職員・非営利団体職員 5. 派遣社員・契約社員 6. 自営業（商工サービス） 7. SOHO 8. 農林漁業 9. 専門職（弁護士・税理士等・医療関連） 10. パート・アルバイト 11. 専業主婦 12. 学生 13. 無職 14. その他の職業
AQ1 失礼ですが、お宅の世帯年収は大体どのくらいですか。

<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 200万円未満</li> <li>2. 200万～300万円未満</li> <li>3. 300万～400万円未満</li> <li>4. 400万～500万円未満</li> <li>5. 500万～600万円未満</li> <li>6. 600万～700万円未満</li> <li>7. 700万～800万円未満</li> <li>8. 800万～900万円未満</li> <li>9. 900万～1000万円未満</li> <li>10. 1000万～2000万円未満</li> <li>11. 2000万～3000万円未満</li> <li>12. 3000万円以上</li> <li>13. 答えたくない</li> </ol>	<p>を、それぞれお答えください。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ほとんどの面で私の人生は私の理想に近い</li> <li>2. 私の人生はとても素晴らしい</li> <li>3. 私は自分の人生に満足している</li> <li>4. 私はこれまで、自分の人生に求める大切なものを得てきた</li> <li>5. もう一度人生をやり直せるとしてもほとんど何も変えないだろう</li> </ol>
<p>AQ2 あなたは結婚していますか？</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 未婚</li> <li>2. 既婚</li> </ol>	<p>QQ1_1 「コンサートを聴きに行く」という活動はどのくらいの頻度でしますか？</p> <p>※週／月／年をプルダウンで選択 ※数値は自由回答</p>
<p>AQ3 子供は何人いますか？</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 0人</li> <li>2. 1人</li> <li>3. 2人</li> <li>4. 3人</li> <li>5. 4人</li> <li>6. 5人</li> <li>7. 6人以上</li> </ol>	<p>QQ1_2 「0回」の方にお聞きします。今後、この活動をしたしたいと思いますか？「はい」の方は、次以降の質問について、「もし仮にその活動をする場合」をイメージして回答してください。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. はい</li> <li>2. いいえ</li> </ol>
<p>BQ1 以下に示す感情を日々の暮らしの中で感じる頻度をお答えください。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. とてもうれしい気持ち</li> <li>2. 少しうれしい気持ち</li> <li>3. とても悲しい気持ち</li> <li>4. 少し悲しい気持ち</li> <li>5. とても幸せな気持ち</li> <li>6. 少し幸せな気持ち</li> <li>7. とても不幸な気持ち</li> <li>8. 少し不幸な気持ち</li> <li>9. とても快い気持ち</li> <li>10. 少し快い気持ち</li> <li>11. とても不快な気持ち</li> <li>12. 少し不快な気持ち</li> <li>13. とても積極的な感じ</li> <li>14. 少し積極的な感じ</li> <li>15. とても消極的な感じ</li> <li>16. 少し消極的な感じ</li> <li>17. とても活発な感じ</li> <li>18. 少し活発な感じ</li> <li>19. とても退屈な感じ</li> <li>20. 少し退屈な感じ</li> <li>21. とてもハッキリした感じ</li> <li>22. 少しハッキリした感じ</li> <li>23. とても眠たい感じ</li> <li>24. 少し眠たい感じ</li> </ol>	<p>QQ2 その活動は誰と一緒にすることが多いですか？</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ひとりですることが多い</li> <li>2. 友人とすることが多い</li> <li>3. 家族とすることが多い</li> <li>4. 同僚とすることが多い</li> <li>5. その他</li> </ol>
<p>BQ2 以下の5つの項目についてどれくらい当てはまるか</p>	<p>QQ3 その活動をする場合、何時ごろに始めることが多いですか？</p> <p>※平日の午前／平日の午後／休日の午前／休日の午後の4パターン ※数値は1～12の範囲で自由回答</p> <p>QQ4 その活動場所まで「行く」場合の交通手段についてお聞きします。その際、どこから、何の手段で、どのくらいの時間がかかりますか？</p> <p>※「どこから」は自宅／職場・学校等／その他からプルダウン ※「手段」は電車／バス／クルマ／自転車／徒歩／タクシー／その他からプルダウン ※「時間」は分に換算して数値を回答</p> <p>QQ5_1 行きの移動で、どれくらい、おカネがかかりますか？</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 0円</li> <li>2. 1円以上 100円未満</li> <li>3. 100円以上 200円未満</li> <li>4. 200円以上 300円未満</li> <li>5. 300円以上 400円未満</li> <li>6. 400円以上 500円未満</li> <li>7. 500円以上 600円未満</li> <li>8. 600円以上 700円未満</li> <li>9. 700円以上 800円未満</li> <li>10. 800円以上 900円未満</li> <li>11. 900円以上 1,000円未満</li> <li>12. 1,000円以上 1,100円未満</li> <li>13. 1,100円以上 1,200円未満</li> </ol>

14. 1, 200 円以上 1, 300 円未満
15. 1, 300 円以上 1, 400 円未満
16. 1, 400 円以上 1, 500 円未満
17. 1, 500 円以上 1, 600 円未満
18. 1, 600 円以上 1, 700 円未満
19. 1, 700 円以上 1, 800 円未満
20. それ以上
<p>Q05_2 前問でお答えいただいた「行き移動」について、お聞きします。</p> <p>1 行き移動は、不都合なく、「スムーズ」(円滑)にできますか？</p> <p>2 行き移動で使う「交通手段」が便利だからこそ、その活動ができると思いますか？</p> <p>3 行き移動で使う「交通手段」に満足していますか？</p>
<p>CQ6_1 その活動が終わった「後」に、他の活動(例えば、食事や買い物、飲み物等)をすることはありますか？</p> <p>1. はい</p> <p>2. いいえ</p>
<p>CQ6_2 それは、どのような活動ですか？ (いくつでも選択可)</p> <p>1. 食事</p> <p>2. 買い物</p> <p>3. お酒を飲む</p> <p>4. カラオケ</p> <p>5. ゲームセンター</p> <p>6. その他</p>
<p>CQ7 その活動場所まで「帰る場合」(帰宅など)移動についてお聞きします。</p> <p>その際、どこまで、何の手段で、どのくらいの時間がかかりますか？</p> <p>※「どこまで」は自宅/職場・学校等/その他からプルダウン</p> <p>※「手段」は電車/バス/クルマ/自転車/徒歩/タクシー/その他からプルダウン</p> <p>※「時間」は分に換算して数値を回答</p>
<p>CQ8_1 帰りの移動を始めるのは、何時くらいの場合が多いですか？</p> <p>※平日の午前/平日の午後/休日の午前/休日の午後 4パターン</p> <p>※数値は1~12の範囲で自由回答</p>
<p>CQ8_2 その帰りの移動で、どれくらい、おカネがかかりますか？</p> <p>1. 0 円</p> <p>2. 1 円以上 100 円未満</p> <p>3. 100 円以上 200 円未満</p> <p>4. 200 円以上 300 円未満</p> <p>5. 300 円以上 400 円未満</p> <p>6. 400 円以上 500 円未満</p> <p>7. 500 円以上 600 円未満</p> <p>8. 600 円以上 700 円未満</p> <p>9. 700 円以上 800 円未満</p> <p>10. 800 円以上 900 円未満</p> <p>11. 900 円以上 1,000 円未満</p> <p>12. 1,000 円以上 1,100 円未満</p>

13. 1, 100 円以上 1, 200 円未満
14. 1, 200 円以上 1, 300 円未満
15. 1, 300 円以上 1, 400 円未満
16. 1, 400 円以上 1, 500 円未満
17. 1, 500 円以上 1, 600 円未満
18. 1, 600 円以上 1, 700 円未満
19. 1, 700 円以上 1, 800 円未満
20. それ以上
<p>Q08_3 前問でお答えいただいた「帰りの移動」について、お聞きします。</p> <p>1 帰りの移動は、不都合なく、「スムーズ」(円滑)にできますか？</p> <p>2 帰りの移動で使う「交通手段」が便利だからこそ、その活動ができると思いますか？</p> <p>3 帰りの移動で使う「交通手段」に満足していますか？</p>
<p>CQ8_4 帰りの移動に、何か「不便」を感じますか？</p> <p>1. 特に不便を感じない</p> <p>2. 少し不便を感じる</p> <p>3. とても不便を感じる</p>
<p>CQ8_5 どのような点で、帰りの移動に不便を感じますか？ (いくつでも選択可)</p> <p>1. 終電・終バスが早い</p> <p>2. 終電・終バスが混んでいる</p> <p>3. 終電・終バスがいつか分からない</p> <p>4. 遅い電車・バスは、なんとなく身の危険を感じる</p> <p>5. タクシーが拾えない</p> <p>6. その他</p>
<p>DQ1_1 「ミュージカル・舞台・落語を観に行く」という活動はどのくらいの頻度でしますか？</p> <p>※週/月/年をプルダウンで選択</p> <p>※数値は自由回答</p>
<p>DQ1_2 「0回」の方にお聞きします。今後、この活動をしたと思いますか？「はい」の方は、次以降の質問について、「もし仮にその活動をする場合」をイメージして回答してください。</p> <p>1. はい</p> <p>2. いいえ</p>
<p>DQ2 その活動は誰と一緒にすることが多いですか？</p> <p>1. ひとりですることが多い</p> <p>2. 友人とすることが多い</p> <p>3. 家族とすることが多い</p> <p>4. 同僚とすることが多い</p> <p>5. その他</p>
<p>DQ3 その活動をする場合、何時ごろに始めることが多いですか？</p> <p>※平日の午前/平日の午後/休日の午前/休日の午後 4パターン</p> <p>※数値は1~12の範囲で自由回答</p>
<p>DQ4 その活動場所まで「行く」場合の交通手段についてお聞きします。その際、どこから、何の手段で、どのくらいの時間がかかりますか？</p>

※「どこから」は自宅／職場・学校等／その他からプルダウン  
 ※「手段」は電車／バス／クルマ／自転車／徒歩／タクシー／その他からプルダウン  
 ※「時間」は分に換算して数値を回答

DQ5\_1 行きの移動で、どれくらい、おカネがかかりますか？

1. 0 円
2. 1 円以上 100 円未満
3. 100 円以上 200 円未満
4. 200 円以上 300 円未満
5. 300 円以上 400 円未満
6. 400 円以上 500 円未満
7. 500 円以上 600 円未満
8. 600 円以上 700 円未満
9. 700 円以上 800 円未満
10. 800 円以上 900 円未満
11. 900 円以上 1,000 円未満
12. 1,000 円以上 1,100 円未満
13. 1,100 円以上 1,200 円未満
14. 1,200 円以上 1,300 円未満
15. 1,300 円以上 1,400 円未満
16. 1,400 円以上 1,500 円未満
17. 1,500 円以上 1,600 円未満
18. 1,600 円以上 1,700 円未満
19. 1,700 円以上 1,800 円未満
20. それ以上

DQ5\_2 前問でお答えいただいた「行きの移動」について、お聞きします。

- 1 行きの移動は、不都合なく、「スムーズ」（円滑）にできますか？
- 2 行きの移動で使う「交通手段」が便利だからこそ、その活動ができると思いますか？
- 3 行きの移動で使う「交通手段」に満足していますか？

DQ6\_1 その活動が終わった「後」に、他の活動（例えば、食事や買い物、飲み物等）をすることはありますか？

1. はい
2. いいえ

DQ6\_2 それは、どのような活動ですか？  
 (いくつでも選択可)

1. 食事
2. 買い物
3. お酒を飲む
4. カラオケ
5. ゲームセンター
6. その他

DQ7 その活動場所まで「帰る場合」（帰宅など）移動についてお聞きします。  
 その際、どこまで、何の手段で、どのくらいの時間がかかりますか？

※「どこまで」は自宅／職場・学校等／その他からプルダウン  
 ※「手段」は電車／バス／クルマ／自転車／徒歩／タクシー／その他からプルダウン  
 ※「時間」は分に換算して数値を回答

DQ8\_1 帰りの移動を始めるのは、何時くらいの場合が多いですか？

※平日の午前／平日の午後／休日の午前／休日の午後の 4 パターン  
 ※数値は 1～12 の範囲で自由回答

DQ8\_2 その帰りの移動で、どれくらい、おカネがかかりますか？

1. 0 円
2. 1 円以上 100 円未満
3. 100 円以上 200 円未満
4. 200 円以上 300 円未満
5. 300 円以上 400 円未満
6. 400 円以上 500 円未満
7. 500 円以上 600 円未満
8. 600 円以上 700 円未満
9. 700 円以上 800 円未満
10. 800 円以上 900 円未満
11. 900 円以上 1,000 円未満
12. 1,000 円以上 1,100 円未満
13. 1,100 円以上 1,200 円未満
14. 1,200 円以上 1,300 円未満
15. 1,300 円以上 1,400 円未満
16. 1,400 円以上 1,500 円未満
17. 1,500 円以上 1,600 円未満
18. 1,600 円以上 1,700 円未満
19. 1,700 円以上 1,800 円未満
20. それ以上

DQ8\_3 前問でお答えいただいた「帰りの移動」について、お聞きします。

- 1 帰りの移動は、不都合なく、「スムーズ」（円滑）にできますか？
- 2 帰りの移動で使う「交通手段」が便利だからこそ、その活動ができると思いますか？
- 3 帰りの移動で使う「交通手段」に満足していますか？

DQ8\_4 帰りの移動に、何か「不便」を感じますか？

1. 特に不便を感じない
2. 少し不便を感じる
3. とても不便を感じる

DQ8\_5 どのような点で、帰りの移動に不便を感じますか？  
 (いくつでも選択可)

1. 終電・終バスが早い
2. 終電・終バスが混んでいる
3. 終電・終バスがいつか分からない
4. 遅い電車・バスは、なんとなく身の危険を感じる
5. タクシーが拾えない
6. その他

EQ0 下記の余暇活動の中で、『あなたが最もよく行うもの』（または最もよく行いたいもの）を選択し、その活動についてそれぞれの質問にお答えください

1. 映画を観に行く
2. スポーツをしに行く
3. スポーツを観戦しに行く
4. 遊園地・テーマパークに行く
5. 美術館に行く
6. 動物園・水族館・博物館等に行く

EQ1\_1 その活動はどのくらいの頻度でしますか？

※週／月／年をプルダウンで選択  
※数値は自由回答

EQ1\_2 「0回」の方にお聞きます。今後、この活動をしたいと思いますか？「はい」の方は、次以降の質問について、「もし仮にその活動をする場合」をイメージして回答してください。

- はい
- いいえ

EQ2 その活動は誰と一緒にすることが多いですか？

- ひとりですることが多い
- 友人とすることが多い
- 家族とすることが多い
- 同僚とすることが多い
- その他

EQ3 その活動をする場合、何時ごろに始めることが多いですか？

※平日の午前／平日の午後／休日の午前／休日の午後 の 4 パターン  
※数値は1～12の範囲で自由回答

EQ4 その活動場所まで「行く」場合の交通手段についてお聞きます。その際、どこから、何の手段で、どのくらいの時間がかかりますか？

※「どこから」は自宅／職場・学校等／その他からプルダウン  
※「手段」は電車／バス／クルマ／自転車／徒歩／タクシー／その他からプルダウン  
※「時間」は分に換算して数値を回答

EQ5\_1 行きの移動で、どれくらい、おカネがかかりますか？

- 0 円
- 1 円以上 100 円未満
- 100 円以上 200 円未満
- 200 円以上 300 円未満
- 300 円以上 400 円未満
- 400 円以上 500 円未満
- 500 円以上 600 円未満
- 600 円以上 700 円未満
- 700 円以上 800 円未満
- 800 円以上 900 円未満
- 900 円以上 1,000 円未満
- 1,000 円以上 1,100 円未満
- 1,100 円以上 1,200 円未満
- 1,200 円以上 1,300 円未満
- 1,300 円以上 1,400 円未満
- 1,400 円以上 1,500 円未満
- 1,500 円以上 1,600 円未満
- 1,600 円以上 1,700 円未満
- 1,700 円以上 1,800 円未満
- それ以上

EQ5\_2 前問でお答えいただいた「行きの移動」について、お聞きます。

- 行きの移動は、不都合なく、「スムーズ」（円滑）に

できますか？

- 行きの移動で使う「交通手段」が便利だからこそ、その活動ができると思いますか？
- 行きの移動で使う「交通手段」に満足していますか？

EQ6\_1 その活動が終わった「後」に、他の活動（例えば、食事や買い物、飲み物等）をすることはありますか？

- はい
- いいえ

EQ6\_2 それは、どのような活動ですか？  
（いくつでも選択可）

- 食事
- 買い物
- お酒を飲む
- カラオケ
- ゲームセンター
- その他

EQ7 その活動場所まで「帰る場合」（帰宅など）移動についてお聞きます。その際、どこまで、何の手段で、どのくらいの時間がかかりますか？

※「どこまで」は自宅／職場・学校等／その他からプルダウン  
※「手段」は電車／バス／クルマ／自転車／徒歩／タクシー／その他からプルダウン  
※「時間」は分に換算して数値を回答

EQ8\_1 帰りの移動を始めるのは、何時くらいの場合が多いですか？

※平日の午前／平日の午後／休日の午前／休日の午後 の 4 パターン  
※数値は1～12の範囲で自由回答

EQ8\_2 その帰りの移動で、どれくらい、おカネがかかりますか？

- 0 円
- 1 円以上 100 円未満
- 100 円以上 200 円未満
- 200 円以上 300 円未満
- 300 円以上 400 円未満
- 400 円以上 500 円未満
- 500 円以上 600 円未満
- 600 円以上 700 円未満
- 700 円以上 800 円未満
- 800 円以上 900 円未満
- 900 円以上 1,000 円未満
- 1,000 円以上 1,100 円未満
- 1,100 円以上 1,200 円未満
- 1,200 円以上 1,300 円未満
- 1,300 円以上 1,400 円未満
- 1,400 円以上 1,500 円未満
- 1,500 円以上 1,600 円未満
- 1,600 円以上 1,700 円未満
- 1,700 円以上 1,800 円未満
- それ以上

EQ8\_3 前問でお答えいただいた「帰りの移動」について、お聞きます。

1 帰りの移動は、不都合なく、「スムーズ」（円滑）に できますか？
2 帰りの移動で使う「交通手段」が便利だからこそ、そ の活動ができると思いますか？
3 帰りの移動で使う「交通手段」に満足していますか？
EQ8_4 帰りの移動に、何か「不便」を感じますか？
1. 特に不便を感じない
2. 少し不便を感じる
3. とても不便を感じる
EQ8_5 どのような点で、帰りの移動に不便を感じますか？ (いくつでも選択可)
1. 終電・終バスが早い
2. 終電・終バスが混んでいる
3. 終電・終バスがいつか分からない
4. 遅い電車・バスは、なんとなく身の危険を感じる
5. タクシーが拾えない
6. その他

### 参考文献

- 鈴木春菜, 北川夏樹, 藤井聡: 移動時幸福感の規定  
因に関する研究, 土木学会論文集 D3, Vol.68, No.4,  
pp.228-241, 2012.
- 国土交通省 道路局 都市・地域整備局: 費用便益分析  
マニュアル, 2008.
- Diner, E., Lucas, R., Schimmack, U., Helliwell, J.: Well-  
Being for Public Policy, Oxford University Press, 2009.
- Diner, E.: Subjective Well-Being, *Psychological Bulletin*,  
Vol.95, No.3, pp.542-572, 1984.
- 川岸梅和, 北野幸樹: 時間的・空間的側面からみた  
余暇活動の動向と特性について: 近隣余暇関連施設  
に関する研究その1, 日本建築学会計画系論文集,  
Vol.61, No.487, pp.167-176, 1996.
- 橋本成仁, 厚海尚哉: 高齢者の余暇活動と主観的幸  
福感に関する研究, 土木学会論文集 D3, Vol.71,  
No.5, pp.567-576, 2015.
- Landry, C.: *The Creative City — A Toolkit for Urban  
Innovators*, London, DEMOS
- 大曾根悠子, 前野隆司: 美しさと幸福の関係解析:  
審美欲求に着目したアンケート調査に基づいて, 慶  
應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント  
研究科修士論文, 2012.
- 蓮沼理佳: 幸福・性格・欲求の調査アンケートに基  
づく幸福感の関係解析, 慶應義塾大学大学院システ  
ムデザイン・マネジメント研究科修士論文, 2011.
- 安永明智, 谷口幸一, 徳永幹雄: 高齢者の主観的幸  
福感に及ぼす運動習慣の影響, 体育学研究, Vol.47,  
No.2, pp.173-183, 2002.
- 松本直仁, 前野隆司: どのような対人関係ネットワ  
ークが主観的幸福感に寄与するか?: JGSS-2003 デ  
ータに基づく対人関係ネットワーク構造に着目した  
分析, 対人社会心理学研究, Vol.10, pp.155-161,  
2011.
- Diner, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., Griffin, S.: The  
Satisfaction With Life Scale, *Journal of Personality As-  
sessment*, Vol.49, No.1, pp.71-75, 1985.
- Russell, J. A.: A circumplex model of affect, *Journal of  
Personality and Social Psychology*, Vol.39, No.6,  
pp.1161-1178, 1980.
- Russell, J. A. & Feldman Barrett, L.: Core affect, proto-  
typical episodes, and other things called emotion: Dissect-  
ing the elephant, *Journal of Personality and Social Psy-  
chology*, Vol.76, No.5, pp.805-809, 1999.
- Västfjäll, D., Friman, M., Gärling, T. & Kleiner, M.: The  
measurement of core affect: A Swedish self-report measure,  
*Scandinavian Journal of Psychology*, Vol.43, No.1, pp.19-  
31, 2002.
- 北川夏樹, 鈴木春菜, 中井周作, 藤井聡: 日常的な  
移動が主観的幸福感に及ぼす影響に関する研究, 土  
木計画学研究・論文集, Vol.67, No.5, pp.697-703,  
2011.
- Pavot, W., Diener, E.: Review of the satisfaction with life  
scale, *Psychological Assessment*, Vol.5, pp.164-172, 1993.
- 大石繁宏: 幸せを科学する—心理学からわかったこ  
と, 新曜社, 2009.
- Lloyd, K. M., Auld, C. J.: The role of leisure in determin-  
ing quality of life: issues of content and measurement, *So-  
cial Indicators Research*, Vol.57, No.1, pp.43-71, 2002.
- 山口泰雄, 土肥隆, 高見彰: スポーツ・余暇活動と  
クオリティ・オブ・ライフ, スポーツ社会学研学,  
Vol.4, pp.34-50, 1996.
- 橋本成仁, 厚海尚哉: 高齢者の余暇活動と主観的幸  
福感に関する研究, 土木学会論文集 D3, Vol.71,  
No.5, pp.567-576, 2015.
- Pacione, M.: The use of objective and subjective measures  
of life quality in human geography, *Progress in Human  
Geography*, Vol.64, pp.495-514, 1982.
- Lättman, K., Olsson, L. E., Friman, M.: Development and  
test of the Perceived Accessibility Scale(PAC) in public  
transport, *Journal of Transport Geography*, Vol.54,  
pp.257-263, 2016.

(2019.3.10 受付?)

## THE IMPACT OF LEISURE ACCESSIBILITY ON SUBJECTIVE WELL-BEING

Masato YUBA, Yuichiro KAWABATA and Satoshi FUJII

It is thought that urban leisure activity have a certain influence on the degree of happiness of people, and in many cases it is necessary to move to the place of activity to do that. However it is not enough to clarify the impact of the convenience of the transportation on subjective well-being through the leisure activity. In this research, we focused on the leisure activity to bring the richness in the life of people, and examined the relationship between accessibility to the activity place, activity frequency, and subjective well-being. We focused on not only a objective index such as time or cost, but also a subjective index easiness of going or satisfaction of transportation as accessibility index.

Result showed that high perceived accessibility and frequency could raise subjective well-being by some activities, and the frequency increase so that perceived accessibility is high.